

書評

A・フオイヤーワーカー著 『中国の初期工業化
——盛宣懷(1844—1916)と官僚企業——』

田中 宏

私は清末の洋務運動の中から生まれた洋務派官僚の一人盛宣懷について、大学で勉強していたが事情があって中途になっていたので編集部の求めにも充分応えることができない。そこで、盛宣懷に関する既存の唯一つの本格的研究書と思われる著作の書評をもって、これにかえたいと思う。即ち、

Albert Feuerwerker: *China's Early Industrialization, Sheng Hsuan-huai (1844—1916) and Mandarin Enterprise*, xiii, 311, xxxii. Harvard East Asian Studies 1. Harvard University Press, 1958.

がそれである。その内容は以下の如くである。

第一章 官督商辦方式 (pp. 1—30)

1 中国の立遅れた工業化の問題 2 「官督商辦」の起源と内容 3 工業化への努力と地方の中心権力 4 開港場の商人からの資本 5 官僚的経営 6 政府の苛税 7 規制的な独占の諸権利

第二章 清末の経済状態 (pp. 31—57)

1 経済思想 2 政府財政 3 貿易と通商
第三章 盛宣懷 (1844—1916) ——官僚にして企業家 (pp. 58—95)

1 盛宣懷の経歴 2 盛宣懷とその家族 3 江蘇の郷紳の一員としての盛宣懷 4 官吏の立場における盛宣懷

第四章 輪船招商局——商辦 (pp. 96—149)

1 輪船招商局の起源 2 四十年間 (1873—1913) における招商局 3 招商局の事業 4 経営者陣 5 招商局の財政 6 官僚的経営 7 不正の問題

第五章 輪船招商局——官督 (pp. 150—188)

1 招商局の官督 (1872—1895) 2 官督 (1895—1908) 3 重役陣対郵伝部 4 漕米独占権と関税上の特権 5 政府の苛税 6 招商局は企業運営の点で成功したか?

第六章 官督商辦諸企業 (pp. 189—241)

1 盛宣懷の「王国」 2 電報総局 3 華盛紡織総廠 4 中国通商銀行

第七章 結論——「官僚資本主義」にむかへ (pp. 242—252)
註 (pp. 253—302) 索引 (pp. 303—311)

筆者はまず「第一次農工商部統計表」(一九〇九)によってそこに登録された二七の企業を調べて、少数の大規模な企業と多数の中小規模の企業の混在、上海等の開港場への著しい偏在を指摘している。その中でひととき目立っているのがほかでもない「官督商辦」企業である。その官督商辦企業をその代表的

な荷ない手の一人盛宣懷を中心に分析して行く。盛は「同治中興」の中で生まれた洋務派官僚の大立物の一人李鴻章の権力の保護の下に、各種の「新式企業」なるものを手がけて行き、かなりの成功を収めた人である。その方式が官督商辦といわれるもので、その起源は「塩の専売」制度の中に求められている。

アヘン戦争以来たび重なる対外硬の政策とその失敗による強制的開港、領土の割譲、それに引きつづく太平天国による清朝権力の弱体化の後をうけて、一部の漢族大官が内と外の力に対抗する為に従来の商末思想をすてて、「以夷制夷」のいわゆる自強策を採用し、その中で軍事工業に引き続いて民用産業にも手をのびし始めた。これらの努力もその推進者が旧来の社会の指導層であるだけに、いろいろ複雑な問題に直面した。

それを著者は次の五つにまとめている(第一章3-7)。

(一)すでに無能となっていた中央権力にかわって登場した地方権力の強力な支持と保護をうけて進められた。李鴻章は二五年間にわたった直隸總督・北洋大臣の座にあつて、北洋軍閥の基礎をつくるとともに、その配下に多くの官督商辦企業を興した。李が日清戦争に敗れて後は南の湖広總督張之洞がそれにとつてかわった。盛宣懷はその前半は李鴻章権力のもので、後半は張之洞権力の翼下で企業活動が続けることができた。(二)資本の来源について、主なものは従来の土地から上る農業余剰ではなく、開港場において外国勢力との密接な関係のうちに生まれた買辦資本である。従来の資金は先駆的工業化(promoting industrialization)には興味をもたず、ただ新式企業が高

利潤をあげるとそちらに流れていくが、もうけが少なくなると又土地投資、高利貸、質屋等に逆流してしまう。従つて不足する資本を調達するために、企業の成功にしばしば悪影響を及ぼすような慣例を続けざるを得なかった。即ち、高利の短期借入、企業の利益の多寡にかかわらず差引かれる「官利(bureaucratic dividends)」の制度、減価償却や保険に対する配慮の不足などである。(三)経営者に関しては多くが官僚の兼務である。督辦、總辦、會辦、提調といったように官僚のために多くのポストが用意されている。官督商辦企業の多くには政府資本が投入されているが——それも清朝中央政府でなく中心となる地方権力の財政の中から——その管理という名目のもとに幾人かの官僚が派遣されてもそれを経営する能力にはしばしば欠けているし、又その採用についてもその人のもつ経験・能力を考ふるよりも、血縁・地縁の従来からの人的関係が先行してしまう。そしてこれらの官僚には有名な不正利得¹中飽がつきもので、それで官吏としての少ない手当の不足を補う慣行がある。従来高度の合理性が求められる近代企業の中に、この種の官僚的風潮がもち込まれたため多くの企業の成功をばむ結果となった。さりとて当時「商人」と呼ばれる人についてみても、要求される合理性或いはあえて危険を冒す決意を十分に持っていたとはいえず、ただ官僚よりは少し融通がきいたに過ぎなかった。(四)企業にかかる税金は中央・地方のいろいろな機関から要求された。時の軍機大臣剛毅が特派されて招商局・電報総局の会計を調らべて年額十萬テールの献納²「報効

(efforts made to return [the imperial grace])」を強要したこともある。県政府の官吏が警察力を支えているからという口実で税金をとられた例もある。さらに内国通過税の「厘金」の制度も存在していた。これらの政府の徴税に反対して株主が何らかのアピールができる法的な制度はなく、ただ官僚の実力にたよって特別な配慮を求めるのみである。(五) 独占的特権が官督商辦企業には与えられていた。招商局は漕運の独占権を、上海機器織布局には他の同種企業の開業を禁ずる独占権を与えられ、電報総局は国境における外国電信線との接続を独占し、漢陽鉄廠は京漢線・粵漢線のレールの製造を独占していた。これらの独占権について当事者は外国勢力の侵入に対抗するためと主張しているが、反面「官利」制度に見られるように集まらない資金を引きつけるためにも必要であった。そして新式企業に投資した人々の利益をまず保証する機能を果たす特権となり、外国勢力の侵入に対抗し中国経済を発展させると考えられていた独占権が結局は官僚資本のためのつかい棒の役割を果たす結果となった。

以上が著者のまとめである。つづいて第二章では清末の一般の経済状況を思想と財政と貿易についてのべている。当時の改革派の人々の思想においてすら伝統的経済構造や価値観の影響の指適を欠き、又農業と工業発展との有機的関連がつかめていないとのべている。財政上の問題としては、地方に留保されて中央に集まらない歳入がかなりあり、又賠償金を負っているなどとして、中央政府には日本のように工業化を促進する資金的余

裕がなかった。貿易の果たした役割について、日本においてはそれは工業化への刺激 (activator of change) となったが、中国にはそれをうけとめるだけの条件がなかったと指摘している。

第三章では官督商辦企業の推進者である盛宣懷の伝記が文集「愚斎存稿」の巻首にある「行述」を中心に利用してかなり詳しく紹介されている。李鴻章勢力の保護のもとにあって招商局を手始めとする諸企業を推進する時期、日清戦争によって李が失脚するや南の張之洞勢力の庇護下に入り漢冶萍公司及びそれとレール供給で不可分の関係にある鉄道建設の仕事にたずさわる時期、南の利権回収運動の圧力のもと張之洞勢力から離れて清朝中央政府の重要メンバーとなり、郵伝大臣として鉄道国有令を發布したのが辛亥革命の導火線となりついには自らの政治生命をたつに至る経過がのべられている。

第四章、第五章は盛宣懷が最初に手がけてかなり成功した官督商辦企業の一つ招商局について、「官督」の側面と「商辦」の側面からそれぞれ具体的分析を行なっている。この内容は前述の五つにさかのぼって要領良く整理されている。そして第六章で盛の手がけた他の企業を紹介し、相互の間には資金・経営の面で密接な関係があり、盛宣懷の「王国」が形成されたとのべている。第七章の結論では、盛宣懷の官督商辦企業は中国経済に基本的変化をもたらすには至らなかったが、中国で二十世紀の中期まで続いている企業形態「官僚資本主義」のモデルを示してくれたとしている。即ち盛宣懷は「自強派」とその後におけ

る国民党の梁士詒、葉恭綽、宋子文、孔祥熙のような後継者との中間項に位置すると。そしてその官僚資本主義が民主的枠の中で中国を近代化する努力の行く手をふさいでいると結んでいる。

以上が本書の内容の紹介である。これについて二、三の感想をつけくわえたい。官督商辦企業を官僚資本主義と結びつけて考える見方は、後者についての具体的な分析が行なわれていないのでその意味では確認出来ないが、私には妥当な結論だと思われる。従来あまりみられなかった清末の企業形態を説明してくれたため、下って国民党時期の官僚資本主義の理解にとっても一つの視角を提供してくれたと思う。西欧からのインパクトを受けた国の経済的指導層の中に生まれる伝統との妥協によって起こる企業形態という見方をすれば、世界史に遅れて登場する国々に共通した一つの視角を提供してくれているともいえる。しかしこの企業形態とその推進者の実証的研究を通じて近代の工業化の課題を説明する方法が必ずしも優れているとはいえない。この方法の問題点がそのままこの労作の中に出ていられると思われる。

中国近代工業化の過程の中で、官督商辦企業は、特に盛宣懷のそれは鐵道国有化策の中に象徴的に現われているように、利

権回収を叫ぶ民族資本との対抗に敗れるのである。官督商辦企業が中国の困難を救い得ないと批判されたのはすでに日清戦争に敗れた時である。江南地方には新しい動きが生まれており、洋務派の経済政策を批判し、民族資本の発展を求める声が大きくなって行き、資金も次第に後者に流れるようになり、勢い前者は外国勢力からの借款にその資金源を求めざるを得ないという破局に向わざるを得なかった。この間の経緯は極めて重要であるが、この著作では追求されていない。盛宣懷の研究の中にもこれらの問題に通ずる糸口がある。基本資料である「愚齋存稿」の中にも、通商条約改訂交渉に当たった時の商約関係のもの、幣制改革に関するもの、そして何よりも鐵道をめぐる複雑な動きの中に、近代工業化の中で官督商辦方式のもつ極めて歴史的な問題が含まれていると思う。又工業化で必然的に問題となる労働力の問題もふれられていない。伝統的農業経済社会との関係を、農業余剰と資本という関係だけでなく、労働力の点からその関係を説明しなければなるまい。書評にあたって、佐伯有一氏と中村義氏のそれを参考にさせていただいたことを付記しておきたい。

(一橋大学大学院元学生)